

ここで使われる材料は、人間の五感を満足させる素材を使ったインテリア、更に住みよく使い勝手もよろいしい住宅が評価される時代だ。今こそ木材の復権に業界あげて立ち上がる時だ。皆様のご協力に期待する。

79号

鹿島神宮参拝

先ごろ鹿島神宮を訪れた。御祭神「たけみかづちのおおかみ」は神代の昔天照大御神の御命令で、出雲の国に天降り、大国主の命と相談し日本国を一つにまとめられた神様だ。関東地方の開拓と鎮撫に当たられ、水陸交通の要衝鹿島の地に鎮まれ、平和の神として仰がれるようになった。中世には、源頼朝など武将が尊信されるようになり、武神として仰がれた。現在の社殿は、徳川二代將軍秀忠の奉納によるものだ。奥の院には徳川家康、楼門には水戸初代藩主で、水戸光圀（黄門の祖父）がそれぞれ奉納したもので、いずれも重要文化財に指定されている。参道のおお鳥居をくぐると、右手に樹齢1200年と推定される杉の大木が神々しく注連縄で飾られ鎮座している。目通り11メートル、高さ40数メートルと記載されていた。

樹齢専念を超えて尚、枝を茂らせあたりを睥睨する様は正にご神木にふさわしいたづまいだ。参道は淡い黄土が混ざった黄砂を踏んで進む、中央やや右側には、5月1日に行う流鏑馬会場が30センチほど土盛りし、繩が張られている。宮司に尋ねると奥宮から楼門に向かって馬を走らせながら矢をいる神事と伺った。当日はさぞかし善男善女の信者たちで賑うことだろう。参道を更に進むと巨樹や古木が生い茂り鬱蒼としたなかにも神々しさのある神域の雰囲気だ。神の鹿が広めの柵に遊び参拝者を慰めている。突き当たり250メートルには奥院が鎮座し、左手には御手洗池から清い水がこんこんと湧き湧き上がり、正に神山の雰囲気だ。この水は神の水として配られているが必ず煮沸してから飲むように但し書きがあった。また、この地は、剣豪塙原朴伝の出身地で、朴伝の記念館があり、土産物屋には朴伝ゆかりの木刀などが陳列され鹿島神宮は、武神としても誉れ高いことが伺われる。材木屋として嬉しいことは、まずこの神宮全体の地域から、森の



精気がフィトンチッドが放出し、参拝者の気持ちを和やかにしていることである。この森は樹齢500年以上と推定される巨樹がおくあり、杉が大部分だが、広葉樹では楠、椎の木タブの木などの巨樹も多く、森の構成を守っている。またもっと嬉しいのは、神社の境内の各所ある建物は全てこの神社のご神木を使用している。年輪の積んだ杉がもっと多く使われているが実にすばらしい年輪を構成している。立て札や、そのほかお百度まいりの印どころなどもこちらは松とみたが、使われている。宮司に尋ねると、大工さんがふんだんに、境内の木材を使用しているとの事を聞き嬉しくなった次第だ。建物や、外部に使用する木材には使いどころによって外材が使用されていたがやはり、国産材が上である。参道の両側に聳え立つ杉、ヤドリギを抱えて尚成長する生命力、二またに分かれながら、共に成長し巨樹となっているさまは、正に材木や冥利に尽きる思いだ。ここでも、木のよさを実感した一日であった。

80号 浜松祭り ー1

遠州浜松には、5月男の節句を中心に、祭りを開催する。祭りは凧揚げと御殿屋台引き回しの二つだ。市内の各町の住人は、半纏股引地下足袋ねじり鉢巻のそろいの、職人姿で祭りに参加する。各町は、おらが、町自慢、それぞれの印半纏で競いあう。ひるまは、遠州灘に面した中田島砂丘で凧揚げ。

夜は、各町の掛け提灯をもつ粋な若い衆に、若い女性、子供衆も同じ衣装で繁華街を御殿屋台が練り歩くさまは、まさに、テレビ時代劇の世界だ。浜松には市内だけで、その数170もの町がある。都市県庁所在地でもない人口わずか81万人の中小都市、東は天竜川から、遠州灘に面し浜名湖を抱きかかるような町、航空自衛隊の基地があり、産業は、ホンダ自動車、ヤマハ楽器中心の軽工業を中心だ。歴史では、徳川家康が武田信玄に追われ、逃げ戻ったと言われる浜松城がある。日本全国どこにでもある典型的な中小都市だ。一昨年には、浜名湖を埋め立てて浜名湖花博覧会を開催した。当初入場者が少なく成否が危ぶまれたが、夏休みを中心に人気が盛り上り大成功にて終幕した。浜松は、遠江の国、東は駿河の国、西は三河の国にはさまれ、戦国武将の草刈場、常に戦が耐えぬ地域だ。土地は、三方ヶ原など台地は、昔はただのやせた荒地だった。また遠州の空っ風と言われるほど風の強いところ、気候は駿河、三河のなかでは厳しい土地柄だ。水も酸性で余り美味しい土地柄だ。ところが、この空っ風が吹くやせた土地、確りせねば草刈場、切り取られるとの危機感からか、遠州の精神は「やらまいか」気質だ。ご先祖の、兎に角なにかやらなければ、生きていけない土地柄から、兎に角、やらねばの気質、遠州言葉で「やらまいか」が生まれた。遠州人は積極進取、切磋琢磨の精神で「やらまいか」が今日の遠州浜松を築いた。すばしっこく、機敏、我慢強く、一度決めたら、できるまでやりとおす精神が「やらまいか」こんな気質が、浜松祭りに受け継がれ、豪快な凧揚げ、絢爛たる御殿屋台で再現されている。



81号 浜松祭りー2

凧揚げ

遠州浜松には、5月男の節句を中心に、祭りを開催する。

祭りは凧揚げと御殿屋台引き回しの二つだ。市内の各町の住人は、半纏股引地下足袋ねじり鉢巻のそろいの、職人姿で祭りに参加する。各町は、おらが、町自慢、それぞれの印半纏で競いあう。ひるまは、遠州灘にした中田島砂丘で凧揚げ、夜は、各町の掛け提灯をもついたなせな若い衆に、若い女性、子供衆も同じ衣装で繁華街を御殿屋台が練り歩くさまは、まさに、テレビ時代劇の世界だ。浜松には市内だけで、その数170もの町がある。江戸時代の職人たちから始まった祭りといわれている。お祭りは5月3・5日の三日間行われ、最後の5日にはファンfareとして、凧揚げ大会では、各町の凧の喧嘩、凧糸きり合戦が展開され各町の若い衆はおらが町の凧が一番と、絡めた道糸を引っ掛け合い、引き合って相手の凧を切る合戦は、正に男の喧嘩、男のロマンであり、切り合い、揉みあう若い衆たちは、力いっぱい戦いながら、掛け声と怒号、進軍ラッパ、陣太鼓のなかで夢幻の境地にある有様、見ているほうも、飛び込んで、糸を引きたくなるような雰囲気だ。周囲は黒山の人だかりひときわ目立つ半纏の総監督メガホン片手で気合いを入れる監督、組長副組長などのたすきを掛けた幹部が、まもり、真ん中で数十人が糸きり合戦を展開している様は素晴らしい、正にこれこそ男と男のぶつかり合い汗がぶつかり合った体から汗が飛び散りなんとも壯觀だ。深川の神輿をワッショイ、ワッショイと掛け声で担ぐのと同じ心理だ。この切り合い凧合戦は実に素晴らしい。聞くところによると、凧糸はすべて凧上げ協会公認の5ミリの麻糸を使用する。「デキ」と称する鉄と砲金でできた滑車を経由して、車付木製ワインチへつながるワインチに巻く糸の長さは各町によって、1000メートルから3000メートルに及ぶといわれる。力と技がぶつかり合う凧合戦は壮絶戦である。糸の切り方は相手の上に乗せ掛けるチョンがけ、下からすくい上げる「釣り上げ」がある。こちらの糸を相手の糸の谷にくい込ませ、差し引き摩擦繰り返し摩擦熱で糸を切るやり方だ。相手の谷にくい込ませるのは、谷は細く山は太い細いところをこすれば摩擦熱で切れる原理だ。

今はすっかり観光名所となり、大勢の観光客が詰めかけ中田島砂丘を埋め尽くすほどの盛況だ。これが各町の凧合戦だ。もう一つのイベントは、「初子凧」だ。初子とは、初めて男の節句を迎える男の子を祝って、各家庭がそれぞれ作るものである。凧に子供の名前を書き、健やかに育ち天まで昇れの願いをこめて揚げる凧、町内の応援をえて、父親が子供のために上げる凧、母親に抱かれた初子は、同じお祭り衣装で肩車などされて参加している。この光景も一つのドラマだ。



82号 植樹祭－1

第57回全国植樹祭が、5月21日、岐阜県下呂市で天皇皇后両陛下を迎えて行われた。下呂市は、木曽川を溯り日本ラインくだりで有名な犬山城付近から、斎藤道三の居城である金華山の手前から、鵜飼で有名な長良川と飛騨川に分岐する。

JR高山線、並行して走る国道41号線が飛騨川にそって溯る。下呂市までの沿線は、険しい山やまに囲まれており、飛騨木曽川国定公園に指定されているところだ。JR高山線は、本線ではいまどき珍しい単線運転の鉄道である。下呂までの所要時間は急行で約2時間を要する難路だ。折からの大雨で、飛騨川が増水し渦流が渦を巻きながら流れるさま、こんな風景を見るたびにいつも、先人達のご苦労に思いが及ぶ、今のように土木機械もない時代に、見上げるばかりの険しい山やまを切り開き、川を堰き止め、道路を作り、トンネルを掘り、そして鉄道をひく作業は、気の遠くなるような時間、人海戦術による土木工事では、多くの怪我人や、時には殉職者もでるほどの難工事であったろうと思うと、現代の我々は、急行列車の指定席に座って景色を眺めていられるのは先人達の想像を絶するほどのご苦労があったればこそである。このようなご苦労を下敷きに生きる我々現代人は、もっともっと自然の源である国土、そして地球環境を大切にし、そして守らねばならぬと思う次第である。

続く



83号 植樹祭—2

先人達のご苦労に思いを寄せながら、飛騨川を溯ると、荒れ狂う飛騨川の濁流を堰き止めていったんダムにし、水量を調節しながら流す治水の技術だ、自然と人間の知恵が、現代風に言えば自然と人間の知恵のコラボレーションで、自然に逆らわず、川をなだめる人間の知恵だ。下呂の入り口に近づくと急流飛騨川は一段と表情をかえる、金山橋から下呂にいたる28キロ、昔風にいえば四里中山七里の迫力のある奇岩怪石が続く名勝だ、もう少し早ければ岩つつじが、秋にはもみじ素晴らしいといわれた。

治山といえば、山崩れを起こさないように山を確り抱きかけるように植えられた計画的な植林だ。木を伐ってそのまま放置すれば、雨で土砂が流れ出し山崩れを起こす山崩れは、やがて川を塞き止め洪水の被害をもたらす、何年か前に、飛騨川に沿って走る国道41号線で山崩れが発生し走行中のバスに大きな被害が出た事故を思い出した。この付近では、治山治水を念入りに実行しているにもかかわらず、計算外の大豪雨のため、森林が支えきれず山崩れを起こしてしまった、大自然のご機嫌を損ねた結果お叱りを受けたのである。こんな思いをつづりながら下呂市に到着した。険しい山を削り飛騨川との間のわずかな土地にしがみつくような下呂の町、下呂温泉の発見は延喜年間（901～923）とも天暦（947～956）ともいわれている。室町時代に僧・万里集九によって書かれた詩文集成材「梅花無尽藏」とされ、そのなかに草津、有馬、と並ぶ良泉であることが書かれている。その後江戸時代に徳川4代に仕えた儒学者・林羅山が、詩集のなかで万里集九と同じ評価を記した。この影響で、江戸時代の中期に有名になり、年間3万人が湯治に訪ずれた。室町時代から、草津、有馬とならぶ、天下の三名泉のひとつ、下呂温泉の泉質はアルカリ性単純温泉だ。続く

植樹祭レセプション

第57回全国植樹祭のレセプションが、5月20日岐阜県下呂温泉水明館で、天皇、皇后両陛下がご臨席して開催された。国務大臣、県内の国、県、市町村、林業関係者ら約450人が両陛下を歓迎した。両陛下は、黒のスーツ、ドレス姿で

来場し熱烈な拍手で迎えられた。主催者の古田岐阜県知事は挨拶で「飛騨と美濃が合併して130年の年に、両陛下をお迎えして、植樹祭を開催できることは二重の喜び」大会会長河野洋平衆議院議長による音頭にあわせ、両陛下はグラスを手に目を合わせた後、笑顔で乾杯された。21日の植樹祭で表彰を受ける入賞者のなかで、ポスターを書いた小学生が、絵を両陛下にお見せしながら「緑がいっぱいになるようかきました」と紹介すると、天皇陛下は「木を植えているところだね、おめでとう」と褒められた。大会テーマ「ありがとう未来へつなぐ森の恵み」の作者は、皇后陛下に「優しい言葉ですね」と褒めてくださったと喜んでいた。

85号 植樹祭—4

これも天の配剤か、前日来の雨もすっかり上がり、まさに日本晴れ絶好の植樹祭日和となった。下呂の宿をそれぞれバスに分乗し会場へ向かった。会場からはかなり距離のある駐車場から、徒步でまず我々参列者がそれぞれ手植えする植樹会場へと向かった。周囲は茶畑、薬草畑が続くつづら折でやや登り勾配の農道を歩くわけだが、結構な距離を歩くわけだが、早朝のこともあるが、これから行われる行事を頭に描いて、厳粛な緊張感からか不思議と疲れない。人間は気持ちの持ち方で何とでもなる、いつも考えていることを実証したような気分だ。道中の沿道には地元と関係者がそろいの服装で我々参列者を出迎えてくれた。関係者の皆さんのが明るく礼儀正しいこと、「おはよう御座います。ようこそお越しいただきました。足元にお気をつけてどうぞ」実際にさわやかで気持ちのよい出迎え、これも「応対は日本一」と評価したい。やや傾斜地だが、よく手入れされた植樹地、それぞれ決められた区域での植樹をすることになった。我々の組は「むらさきしきぶ」の苗木をスコップを使って植樹した。あとからわかったことだが、天皇、皇后両陛下は植樹祭でいくつかの木を植えられたが、そのなかに「むらさきしきぶ」があると聞いた。私たちは天皇皇后両陛下と同じ木を植えたことになり、恐縮のうえ、大変嬉しく思う次第である。



86号 植樹祭—5

時間待ちの郷土芸能

私たちは植樹を終え、会場へ到着したが開会までは数時間ある。この時間を利用してら参列者のために、郷土の物産の展示即売会場が設営され、郷土の名物物産が展示された。また郷土自慢でらい、ここだけの伝統ある郷土芸能が披露された。ご当地岐阜県は美濃の国と飛騨の国がひとつになった県、美濃は美濃、飛騨は飛騨の特色を持っている。物産は、飛騨牛の串焼き、干肉、みたらし団子、五平餅などなどの名物が特別価格で展示即売され参列者の好評を得ていた。

芸能は奉納お神楽と獅子舞と、太鼓が素晴らしい、特に獅子舞は三人がかりの肩車で背の高いそしてボリュームの大きな獅子を演出し、会場から大きな拍手喝采を受けた。ここの大鼓は起こし太鼓と称する飛騨古川の名物である。飛騨古川に伝わる古川祭りのお越し太鼓は、桜の咲く春先に行われる行事だが、本日は植樹祭の前段として特に参列者のために、披露された。特色は、撥が木ではなくかなものの撥である。普通考えると、撥は木が常識であり、かなものの撥では、太鼓が破れてしまうと思うが、ここの大鼓は破れることなく、金物の撥で、独特の音を出しているこんな芸能に見とれているうちに開場の時間となった。岐阜県の主催者の心憎いまでの接待には恐れ入った次第である。

